

10世紀から11世紀における 「九姓タタル国」

白 玉 冬

は じ め に

10世紀から11世紀において、オルホン地方（オルホン河流域の草原地帯）を含めたモンゴル高原中央部を占有していたのは、『遼史』では「阻卜」、五代・宋側の史料では「達靼（Tatar）」と記録された遊牧民集団である。天賛3年（924）、契丹がオルホン地方に侵攻した時、そこで遭遇したのは阻卜、つまりタタルであった⁽¹⁾。一方、太平興国6年（981）、宋使・王延徳が西ウイグル王国への途上にオルホン地方を訪れた時、そこを占有していたのは「九族達靼」、即ち九姓タタルであった〔前田1948：235-242；岑1957：120-126〕。九姓タタルと阻卜の関係に関しては、諸説紛々としていて、定説はないものの、阻卜の中心的な部族が九姓タタルだったことだけは疑いない〔前田1948：249-256；陳1986：217-218〕。

モンゴル高原における契丹の優位が確立された目安として、統和22年（1004）におけるモンゴル中央部にあるトウラ河畔の可敦城に鎮州建安軍⁽²⁾を設置したことが考えられている。この鎮州建安軍とは、阻卜諸部に対する防御と支配を目的にした辺防城であるが、設置されて以降も、阻卜諸部による反乱が頻繁に起こっていたことが『遼史』から窺える⁽³⁾。また、契丹が匈奴、柔然、突厥、ウイグル、モンゴルなど、その他のモンゴル高原を支配した遊牧国家のように、ゴビ砂漠以北の高原の中心地域を本拠地にしていなかったのは事実である。以上2点を考慮すると、10世紀から11世紀において、モンゴル高原の歴史の主役は、契丹以外に、九姓タタルも含まれると考えるべきであろう。

問題の九姓タタルがモンゴル高原中央部を占有していた10世紀から11世紀に関しては、モンゴル高原の歴史は、他の時期に比べて不明な点が多い。その主な理由として、当時のモンゴル高原の遊牧民は自ら文字史料を残しておらず、また彼らのことを最も多く記録した『遼史』を始めとする漢文の編纂史料は、殆ど朝貢、或いは反乱の記事を中心にしたものであることが挙げられる。そのため、これらの史料を利用して、九姓タタルを中心とした当時のモンゴル高原における遊牧民の歴史を考察するには限界がある。そこで、本稿ではモンゴル高原の西北、イエニセイ河上流地方から発見された、九姓タタルに関係する古代突厥ルーン文字で書かれた碑銘に対する分析を中心に、10世紀から11世紀における九姓タタルの社会がどういう段階まで発展していたかを考察する。

イエニセイ河上流地方から発見された古代突厥ルーン文字で書かれた記念銘文は、普通イエニセイ碑銘と呼ばれ、古代キルギス人が残したものだと言われているが、その多くは死者の墓碑銘である。ワシリエフ（Д. Д. Васильев）は1983年にラドロフ（W. W. Radloff）、オルクン（H. N. Orkun）、マロフ（С. Е. Малов）による先行研究をまとめつつ、それまでに発見されていたイエニセイ碑銘を計145個収録し、新たな通し番号を振り、一部の写真と共に全部の筆写・翻字（Transliteration）を公刊した〔Васильев 1983=KTP〕。本稿ではワシリエフが発表した翻字と写真を頼りに、九姓タタルを記録したE59碑銘を中心に論を進めたい。

第1節 E59碑銘テキスト及び訳注

E59碑銘（Herbis-baary）は1960年に旧ソ連のトゥバ共和国のウスチ＝エレゲスト（Ust'-Elegest）の西15kmのウルグ＝ケム河の右岸のヘルビス＝バアルで発見された〔Ščerbak 1963: 145-146; KTP: 33-34〕。石の四面に彫られた銘文は合計9行あり、そのうち、東面第2行は他の行に比べ、天地が逆になっている。シチェルバクは最初は東→西→北→南面の順で読み〔Щербак 1961: 239〕、後に東→南→西→北面の順で読んでいる〔Ščerbak 1963: 145〕。その後、ワシリエフは本

碑銘をE 59の通し番号で収録し、写真・筆写と翻字を掲載している [KTP: 34, 71, 112]。次いでコルムシン (И. В. Кормушин) は翻字・転写とロシア語訳を発表し [Кормушин 1997: 245-246]、またアマンジョロフ (А. С. Аманжолов) は筆写・転写とロシア語訳を新たに紹介している [Аманжолов 2003: 138-140]。本稿はタムガのある東面をスタート面と見なして、時計回りの東→南→西→北面の読み順に従う。

以下では上掲の研究成果によりつつ、KTPの写真及び筆写と翻字を頼りに、本碑銘の新たなテキストと訳文及び必要最小限の語彙注釈を提示する。なお、本稿ではイエニセイ碑銘を含めた突厥ルーン文字碑文史料を引用する時、碑文の東・西・南・北面を英字E・W・S・Nで表示する。また、転写において、: は碑文の区切り符号、イタリックは残画が確認できる文字、太字は推定復元した文字、下線は碑文で彫られていない母音、/ は完全に破損した文字を表す。アルファベット下のダイアクリティカルマークは初回表記時のみ付す。訳文において、() は補足説明、* は文字が判読できない部分、[] は再建テキストの推定復元した太字部分に相当する。

〔史料A〕E 59碑銘

1. E 1 üç: oylanımın: ulyaturu **umadım-a**

三人のわが息子たちを成長させることが [できなかった、私は。
ああ!]

2. E 2 /// esizim-ä: buñım-a: quyda: qunçuyıma: büküşmädim

*** 私の不幸よ! ああ! 私の悲痛よ! ああ! 谷間の我が公主に対し、告別をしなかった、私は。

3. E 3 är añım: külüg yigän qañım: bodun: bägi ıñal: ögä

私の成人名はキュリュグ=イゲンで、私の父は民のベグ(領民酋長)たるインガル=オゲである。

4. E 4 yäti: otuz: yaşımda: elım: üçün: toquz tatar elikä **bardım**

私の二七歳の時に、私の国のために、九(姓)タタル国に [私は] 行 [った]。

5. S 1 uri: qadašim: üč: äkinim: qiz: qadašim: üč yančim
私の男親族よ！私の三人の子供よ！私の女親族よ！[私の]三人の妾よ！
6. W 1 el äri üčün: üč: asiy-a: ta /////
国の男のゆえに、三種の恩恵*****
7. W 2 elim: qanim-a: täñritäğim: yita: bükma**dim**
私の国よ！私のカン（可汗）よ！ああ！私の神巫よ！せんかたなし！お辞儀（＝お別れの挨拶）をしなかつ [た、私は。]
8. N 1 qalin: qadašimqa: bükma**dim**: yita äkinim: ečim: adiri**ltim**
/////////
私の数多くの親族に対し、お辞儀をしなかった、私は。せんかたなし！私の子供よ！私の兄よ！[私は] 離別 [した]。***

9. N 2 ögümkä bükma**dim**
私の母に対し、お辞儀をしなかった、私は。

【語 注】

2. esizim-ä: 名詞 esiz に一人称所有語尾 +m「私の」、更に感嘆詞の ä が接続している。esiz は、11世紀のカーシュガリー (Maḥmūd al-Kāšgarī) のトルコ語辞書では「悪い・いたずら」[CTD 3: 27] と、クローソン (G. Clauson) の13世紀以前のトルコ語語源学辞典では「悪い」[ED: 253] と解釈されているが、護雅夫は「無念」と訳している[護1987: 522 R2]。ここでは直後の名詞 buğ「悲しみ」[ED: 347] と類語重複になっていると見られるので、「悲しみ」と対応する「悪さ」と考えて、「不幸」と解釈する。

2. quy: 護が先行研究の諸説を分析して考察を行なっている。氏は「宮中内部にある、女性の部屋への門、婦人の居住する部屋」という漢語の「閨」から由来したという qui 説を退け、「窪み・川床・岸」という古トルコ語の quy に由来するという説の合理性を

25, 65, 103; 護1987: 522 R1]。また同じ KTP に収録されている E 11 (Begre) 碑銘の第 9 行は次のようになっている [KTP: 20, 61, 92]。

〔史料 B〕E 11 碑銘第 9 行

beš yegirmi: yašimda: tabyač qanya: bardim-a ār ārdimim üčün
alipan⁽⁴⁾: altun: kümüşig: āgri tävä eldä: küči: qazyandim-a

私の一五歳の時に、タブガチ（＝中国）のカンのところに、私は行った。ああ！男としての我が男徳の故に、金銀を、エグリ駱駝を国（＝タブガチの国）から受け取って、その力を私は獲得した。ああ！

〔史料 B〕によると、E 11 碑銘の主人公（被葬者）は 15 歳の時に、tabyač qan「タブガチのカン」、即ち中国の皇帝のところへ行ったことがあるという。これは主人公が朝貢使節団のメンバーとして、中国へ出使したことを意味する。

上掲二例（E 29・E 11）において、外国へ行ったことは共に bar-「行く」で表されている。これに鑑みて、toquz tatar elikā「九（姓）タタル国に」に続いて、B の文字で始まる本箇所の単語を bardim「わたしは行った」と推定して復元する。

5. äkinim: シチエルバクが発表した写真では文字は kinm となっているが、彼は künim と転写している。コルムシンとアマンジョロフは kinim と読んでいる。KTP では、その写真から i か ü か判断しにくい第 2 文字は ü と読まれている。他方、クローソンは äkin には「収穫されていない作物」という意味があるとし、本文を引用し、äkin の意味を「子供たち・子孫」と推定している [ED: 109]。本稿では ED の解釈に従う。

7. tägritägim: tägritäg は語源的には名詞 tägri「天」に接尾辞 + täg が付いた「天のごとく」という意味の形容詞であるが、ここでは一人称所有接尾辞 + m「私の」を伴っており、elim「私の国」・qanim「私のカン」と並立される名詞として機能している。周知のように、内陸アジア社会には古くから tägri「天（天神）」崇拜が存在する。この天神を含めた神や精霊に接触・交流し、彼らと人間社会との間を結びつける人物はシャーマンなのである。前近代の内陸

アジア社会の思想面におけるシャーマンの働きは、時代こそやや降るが、モンゴルの勃興からより鮮明に窺える。チンギス＝カンの権威まで脅かした大シャーマンのココチュ（Kököčü）は、またテブ＝テンゲリ（Teb-tenggeri）と呼ばれ、その活躍は村上正二の解説に見えるとおりである〔村上1976：116, 124-126注1〕。Teb-tenggeri の Teb は tenggeri の意を強める接頭辞で、普通形容詞の前にしか使われない。このように、形容詞的な tenggeri が名詞として使われていることは、E 59碑銘の täŋritäg の使い方と同様である。他方、古代キルギス社会がシャーマンと密接に関係していたことは、護の指摘したとおりである〔護1986：466-470〕。このように考えると、キルギス人にとって、天のような存在で、国とカンと肩を並べるほど重要だった täŋritäg は、神や精霊と人間との媒介者でもあるシャーマンに対する尊称と見なしてよからう。

7. yïta：イエニセイ碑銘に現れる頻度が高い語彙であるが、復元と解釈に関しては、先行研究では意見は一致していない。護は先行研究を紹介したうえ、一種の感嘆詞と見なして、「せんかたなし」と訳している〔護1962a：523, 548注29〕。当面はそれに従う。

さて、本碑銘は従来公表されている全てのイエニセイ碑銘中、ただ一つ九姓タタルの名称を記録したものである。第4行後半の toquz tatar「九（姓）タタル」に続く文字は今まで読まれていなかった。むしろ、先行研究では第4行の内容から、墓主は27歳の時に九姓タタルに対する戦争に参加したか⁽⁵⁾、或いは九姓タタルのところに行った〔Аманжолов 2003: 140〕と推定されてきた。しかし、私は新たに問題の箇所を文字を改めて子細に検討した結果、それらの残画を lkaB ////と復元して、直前の toquz tatar と合わせて、toquz tatar elikä bardim「九（姓）タタル国のその国に私は行った」と解釈するに至った。このように、E 59碑銘から、その他の史料からは全く知られていなかった重要な事実、即ち九姓タタルはキルギス人から「九姓タタル国」と呼ばれていたことが判明するのである。ここについて「国」が「国家」としての内実を伴うものであったことについては、第3節以降で論じたい。

第2節 タムガの様式から見たE59碑銘の紀年

E59碑銘のようなイエニセイ碑銘は内容が短く、主に被葬者の名前・称号・年齢、生涯の活躍などを記述し、且つその内容には紀年を直接指し示す記述がないのが通例である。その作成年代を確定するのは極めて困難であるが、語彙の特徴や氏族標式のタムガなどを通じての推定が可能な場合もある。本節ではタムガから見たE59碑銘の紀年を考えたい。

コルムシンによると、E59碑銘のタムガは、E10 (Elegest 1)・E100 (Bayn-kol)・E147 (Eerbek 1)・E149 (Eerbek 2)と共に、主要部が同類の「𐰽」に分類できるという [Кормушин 1997: 228]。これらの碑銘はE59碑銘の発見地ヘルビス＝バアルを中心に、ウルグ＝ケム河沿いに半径約30km以内の地域に分布しているのがわかる [KTP: 10; Кормушин 1997: 228, 242, 247, 252, 254]。発見場所の距離が遠く離れておらず、且つタムガの主要部が同様であるこれらの碑銘は、やはりある限られた時期における、この地域を代表する有力な同一家系のためのものと考えるべきであろう。写真 [KTP: 88, 112]を確認するかぎり、そのうちのE10のタムガは「𐰽」となっており、一方のE59の方は「𐰽」となっている⁽⁶⁾。

上図からわかるように、両タムガの相違点は、左上部の横線が、E59では2本であるのに対し、E10では1本のみである。両タムガは限られた時期の同一家系に属するものと見られることから、筆者は左上部の横線が1本多いことは、本家から分立した分家が1回世代交代をしたことを意味し、E59の被葬者はE10の被葬者の次世代に当たると推定する。

一方、護が研究した [護1986: 441-493] ように、E10碑銘はE11・E42 (Baj-bulun 1) と共に、他のイエニセイ碑銘では確認できない共通した *säkiz adaqlıy barım* 「8本脚を持つ私の財産 (家畜)」という特殊な表現をもっている。これは、これらの碑銘の作成年代が大きく離れていない可能性が高いことを思わせると筆者は考えるのである。そこで、E10碑銘の紀年を考察する前に、まずE11碑銘の作

表：キルギスの中国に対する朝貢年代

| No. | 西暦 | 年 代 | 出 典 |
|-----|--------------------|--------|--------------------------------|
| 1 | 643 | 貞観17年 | 『太平寰宇記』 卷199 [文海出版社1963：3820] |
| 2 | 648 | 貞観22年 | |
| 3 | 653 | 永徽 4 年 | |
| 4 | 675 | 上元 2 年 | 『宋本冊府元龜』 卷970 [中華書局版1989：3846] |
| 5 | 708 | 景龍 2 年 | 『宋本冊府元龜』 卷970 [3847] |
| 6 | 722 | 開元10年 | 『宋本冊府元龜』 卷975 [3875] |
| 7 | 723 | 開元11年 | |
| 8 | 724 | 開元12年 | 『宋本冊府元龜』 卷970 [3849] |
| 9 | 747 | 天寶 6 年 | 『宋本冊府元龜』 卷971 [3852] |
| 10 | 842 | 会昌 2 年 | 『資治通鑑』 卷246 [中華書局標点本1956：7968] |
| 11 | 843 | 会昌 3 年 | 『宋本冊府元龜』 卷972 [3857] |
| 12 | 844 ⁽⁷⁾ | 会昌 4 年 | 『全唐文』 卷700 |
| 13 | 845 | 会昌 5 年 | [中華書局影印本1983：7187-7188] |
| 14 | 863 | 咸通 4 年 | 『資治通鑑』 卷250 [8107] |
| 15 | 866 | 咸通 7 年 | 『資治通鑑』 卷250 [8117] |

成年代を考えたい。

前節で引いた〔史料B〕から、E 11碑銘の主人公は15歳の時に中国へ出使したことがわかる。他方、漢籍から知られるキルギスの中国に対する朝貢記録は上の表のようである。

上の表から、キルギスの中国への入貢はすべて唐代（618～907年）に属し、最後の朝貢はNo.15 が示すように、咸通 7 年（866）であることがわかる。一方、『新唐書』 卷217下・回鶻伝黠戛斯の条 [中華書局標点本1975：6150] によると、キルギスは咸通年間（860～873年）に 3 回朝貢したが、それ以後に関しては、史官は記録していないという。つまり、キルギスと唐との使節往来は、およそ873年を下限にすべきと考えられる。他方、E 11碑銘第 6 行には yašim yeti yetmiş 「私の年は六七歳である」 [KTP: 20, 61, 92] とあり、つまり墓主は67歳で死んだのである。墓主の中国に朝貢した時の年齢と死亡した年齢を、キルギスの唐に対する朝貢の下限と合わせて考えると、E 11 碑銘の紀年の下限は925年と推定して問題がなかろう [計算法は： $67 - 15 + 873 = 925$ 年]。

ところで、突厥ルーン文字碑銘のうち、720～730年代に成立した

突厥のトニユクク碑文・キョル＝テギン碑文・ビルゲ可汗碑文、また750年代に完成したウイグルのテス碑文・タリят碑文・シネウス碑文は、内容的に豊富で分量も多く、突厥及びウイグルの勃興の歴史を如実に記録し、北アジア遊牧民の長編英雄叙事詩の原型と考えてよい。これに対し、イエニセイ碑銘の方は分量が少なく、文法的・書写的ミスが目立ち、プロの書写能力を持つ学識者によるものが少ないと考えられている〔護1986：443-444〕。わずか9行でありながら、東面第2行が他の行と天地が逆になっているE59碑銘は、正にイエニセイ碑銘中の代表的な一つと考えられる。E59碑銘を突厥・ウイグルのルーン文字碑文と比較すると、明らかにE59碑銘の方は文化的には未発達な状態にあることがわかる。

E59碑銘の発見地を含めた現ロシア連邦のトゥバ共和国とハカス共和国にあるイエニセイ碑銘の二大分布地は、閉ざされた山間盆地にあり、外部のトルコ系民族の文字文化との頻繁な交流に疎かった状態にあったと見られる。実際、イエニセイ碑銘が文化的に未発達な状態で書かれているのはその影響であろう。つまり、文化的には未発達な状態で表現されているイエニセイ碑銘の存在は、作成年代が古いということではない。このように考えて、筆者はE11碑銘の紀年の上限は、突厥・ウイグルの突厥ルーン文字による本格的な碑文が属する8世紀前半～中葉以降と考える。この考えを、上掲キルギスの唐に対する朝貢記録と合わせて検討すると、〔史料B〕E11に見える中国へ出使した年代はNo.10の会昌2年、即ち842年以前に遡らないと推定される。こうして、上で挙げた紀年の下限に関する計算方法と同様に、E11碑銘の紀年の上限は894年と推算できることになる。即ち、E11碑銘の作成年代は894～925年の間に属すると推定できるというのが筆者の考えである⁽⁸⁾。

もしこの考えが正しいなら、その作成年代がE11碑銘とほぼ同時期と思われるE10碑銘の紀年は、やはり同時代に属する可能性が高い。この意味で、筆者はE10碑銘の作成年代を10世紀中葉と推定するクイズラソフの見解〔Кызласов 1960: 119〕には同意できる。それなら、タムガの様式から、その墓主はE10碑銘の墓主より一代代遅

いという筆者の仮説に基づけば、E 59碑銘の紀年は単純に考えてこれより遅いことになる。いずれにせよ、タムガの様式から考えうるE 59碑銘の紀年の上限は、10世紀初頭以前に遡らないのは確かである。一方の下限は、E 10とE 11を念頭に入れると、11世紀に下ることとはなかろう。

第3節 「九姓タタル国」について

前節では、タムガから見たE 59碑銘の紀年に関して所見を述べた。本節では語彙 Toquz Tatar eli「九姓タタル国」を中心に、話を進めていきたい。

イエニセイ碑銘を含めて、突厥ルーン文字碑文のうち、明らかに Toquz Tatar という固有名詞を確認できるのは、E 59碑銘以外では、突厥のビルゲ可汗碑文E 34 [cf. Tekin 1968: 244, 277; 小野川1943: 305]、ウイグルのシネウス碑文E 1・E 3 [cf. 森安ほか2009: 12-13, 35]、タリят碑文N 2・N 4 [cf. 片山1999: 170, 173-174] である。しかし、その後ろに el が接続した Toquz Tatar eli という形は、筆者の知る限り、E 59碑銘が唯一である。では、注目の Toquz Tatar eli はどういう国であろうか。

護によると、古トルコ語の el「国」には二つの意味があり、一つは可汗が支配する「国家」、一つは可汗の一族が封建的諸侯として持っている「采邑」のことであるという〔護1962b: 97-98〕。Toquz Tatar eli の場合は、部族集団名の後に el が接続した形である。これは何を意味するのであろうか。

1067年にウイグル語ウイグル文字で書き写された〔森安1989: 20-21, 26-27注89〕ハミ本『弥勒会见記』(Maitrisimit)の序章第14葉は一種の祈願文であるが、そのうち、A面第20～27行に次の文が存在する。

〔前略〕 taqı y(e)mä bu buyanay äñ öñrä [ävirär] biz t(ä)ñri bügü el
bilgä arslan t(ä)ñri uyğur tärkänim(i)z qutıña alqatmış on uyğur eli:
otuz tegit oylanı: toquz elçi bilgäsi: miñ tapınur tüzän içräki-läri
birlä miñ tüzän yılqa tägi el aşayu y(a)rliqamaq-ları bolzunlar: 〔後

略] (9)

〔前略〕更にまた私たちはこの福德を真っ先に回向する。テングリ＝ブуг＝イル＝ビルゲ＝アルスランという神聖なる我らのウイグル＝テルケン陛下に。(彼は) 祝福された十(姓)ウイグル国(＝西ウイグル王国)の三十(人)の王子たち、九(人)の国使大臣、千の奉使者(＝護衛)、万の内臣たちと共に、千年万年に至るまで国を楽しんでくださることになるように！〔後略〕

上文中、on uyğur eli は、いうまでもなく、西ウイグル王国を指すのである。またハミルトン(J. Hamilton)が研究した敦煌出土10世紀のウイグル人が残したウイグル語の手紙のうち、第15文書の第27～28行[Hamilton 1986: 85]では、次の文が確認できる。

men yaw uluy tiräk oyli maxučor täğri yaqlaqir eli(ä) bir bardım

〔後略〕

私ゴー＝ウルグ＝テレクの息子マフ Chol は、神聖なヤグラクル国(＝甘州ウイグル王国)に一回行った〔後略〕。

上文中、主人公のマフ Chol が行った国は yaqlaqir eli 「ヤグラクル国」と記されている。この yaqlaqir eli が甘州ウイグル王国を指すことは、ハミルトンのいうとおりである[Hamilton 1986: 92 注15. 27]。

このように、上掲2例から判断すると、古トルコ語において、部族集団名に el が接続した場合、その el は某部族集団が構成していた「国家」を指すと考えるべきである。これに鑑みると、キルギス人が九姓タタルを Toquz Tatar eli と記録したのは、彼らが高度の政治集団、乃至「国家」を形成していたと認識していたことによる可能性が極めて高い。

一方の漢籍を見ると、『統資治通鑑長編』卷7・乾徳4年(966)6月条[中華書局標点本1979: 173]には「于塔坦国天王娘子及宰相允越皆遣使来修貢(タタル国の天王娘子及び宰相允越がみな使者を派遣して貢物をおさめにきた)」とあり、また同書卷10・開宝2年(969)の条[237]には「塔坦国天王娘子之子策卜迪来貢(タタル国の天王娘子

の息子である策ト迪が朝貢にきた)」とある。前掲朝貢記録から、タタル国には天王娘子や宰相がいたことが知られる。

トルコ系民族がモンゴル高原を支配していた時代、その配下にあったモンゴル系のタタルの部族集団は文字文化を持っていたトルコ系民族から文化的影響を受けたと言われる⁽¹⁰⁾。九姓タタルがその顕著な一例であることは、前田と陳のいうとおりである〔前田1948：248；陳1986：217-218〕。上で紹介したタタル国に見える「天王娘子」及び「宰相允越」の称号は、以下に述べるように、正に古トルコ語で解釈できるのである。

張広達・榮新江両氏が、およそ930年前後に西ウイグル王国で作成されたと推定している〔張・榮1989：218〕敦煌出土 S.6551vb「仏説阿弥陀経講経文」の讃歌部分には、西ウイグル王国の可汗一族と官僚が挙げられている。関連部分とその意識は、以下のようになる。

〔史料C〕『仏説阿弥陀経講経文』第10～27行⁽¹¹⁾

〔前略〕睹我聖天可汗大迴鶻国、莫不地寛万里、境広千山、国大兵多、人強馬壯。天王乃名伝四海、得（德）布王（乾）坤、卅余年国安人泰。早授諸仏之記、勳（頼）蒙賢聖加持、権称帝主人王、実乃化身菩薩。諸天公主鄧林等、莫不陣（貌）奪群仙、顔如桃慈（李）、李（慈）人（仁）玉潤。〔中略〕諸天特勲、莫不赤心奉国、忠孝全身。〔中略〕更有諸宰相・達干・都督・勅使・薩温・梅録・莊使・地略、応是天王左右、助佐金門。〔後略〕

〔前略〕我が聖天可汗大迴鶻国を見れば、正に国土が万里に達するほど寛く、領域が千の山を収めるほど広く、国が大きく兵が多く、軍隊が強くて軍馬が優れている。天王の名は四海に伝わり、徳は乾坤に広がり、三十余年、国は安定し、民は安らかである。（天王は）早くに諸仏の予言を受けられ、仏のおかげでその護念を蒙り、仮に帝主人王と称されるが、実は菩薩の化身である。諸々の天公主鄧林らは、誰も姿が姫よりも上品で、容貌が花ほど美しく、慈しみが深くて美德を持っている。〔中略〕諸々の天特勲は、誰も赤心を国に捧げ、忠義と孝行は全身にある。〔中略〕更に諸々の宰相・達干・都督・勅使・薩温・梅録・

莊使・地略があり、すべて天王の臣下で、金門（宮殿内の可汗）を補佐している。〔後略〕

周知のように、西ウイグル王国の最高支配者は可汗である。しかし、前掲〔史料C〕からわかるように、その可汗はまた「天王」と呼ばれていたのである。ならばタタル国の「天王」も、西ウイグル王国の場合と同様に、国内の最高支配者を意味するのではなかろうか。張・榮両氏〔張・榮1989：227〕は「天王」を *tängri qayan* 「天なる可汗」の意識と見なしているが、私はそれをウイグル文書の *tängri elig* と解釈する森安孝夫の説〔森安1991：144, 148〕の方がより正確と思うのである。

次に、タタル国の「天王娘子」の「娘子」は漢語で「夫人」という意味であるが、やはり〔史料C〕からヒントが得られる。〔史料C〕の「天王」の後の「天公主鄧林」に関しては、張・榮両氏はウイグル語の *tängri qunčui tängrim* にあたるとし、「神聖な公主夫人」と解釈して、西ウイグル王国の可汗の夫人「天公主」を指すと指摘している〔張・榮1989：227〕。即ち、西ウイグル王国では可汗の夫人は「鄧林」*tängrim* と呼ばれていたのである。同様に、タタル国の「天王娘子」の「娘子」は古トルコ語の *tängrim* で解釈でき、結局「天王娘子」は古トルコ語の *tängri elig tängrim* と復元できるとすれば、「神聖な国王夫人」という意味と考えられる。

タタル国の「宰相允越」は同時代のウイグル関係の史料に多く見られるが、〔史料C〕では「宰相」は「天特勲」の次に置かれている。「特勲」は古トルコ語の *tegin* に相当し、可汗の息子が兄弟である「王子」を指すが、「天特勲」は *tängri tegin* と復元でき、「神聖な王子様」の意である〔張・榮1989：228〕。即ち、〔史料C〕から、大臣のトップとしての「宰相」の地位は、可汗一族の次であることが判明する。

更に、中国歴史博物館所蔵トルファン出土西ウイグル王国時代のマニ教寺院経営関係ウイグル語文書が問題の「宰相允越」を正しく理解するのに役立つ。「総8782T 82」・「Y974/K7709」という2種の番号を持つ本文書には11箇所公式の朱方印が押されており、森安

が改めて読み直したように、その朱印は「大福大回鶻國中書門下
於迦斯諸宰相之寶印」である〔森安1991：127-128〕。森安によると、
朱印中の「於迦斯」は東ウイグル可汗国時代から有名なウイグル
の称号 *el ögäsi / ügäsi* 「国の顧問」の音写で、そのランクは宰相ク
ラスと考えられてきたが、この印鑑で中国の「中書門下」に対応し
ていることからそれは確認できるという。即ち、西ウイグル王国
では漢字で表された「宰相」は、ウイグル語の *el ögäsi / ügäsi* に
あたると見られる。他方、先に紹介した『統資治通鑑長編』巻7に
見えるタタル国の「宰相允越」の「允越」は、その中古音は *ŷüen-
jīwet* と復元できるという〔Karlgren 1923: 108, 380〕。筆者はこの「宰
相允越」も、同様に古トルコ語の *el ögäsi / ügäsi* で解釈できると
考える。このように、タタル国の「宰相允越」は、西ウイグル王国
の朱印に見える「中書門下於迦斯」に対応するように、タタル国
の「国の顧問」と理解してよからう。

以上、タタル国の官職名は、すべて史料上確認できるわけではない。しかし、漢籍に残された「天王 (*täŋri elig*)」と「宰相允越 (*el
ögäsi / el ügäsi*)」を頼りに、タタル国には「天王」を頂点とし、「宰
相」を官僚のトップとしたピラミッド状の官制があったと推定して
問題がなかろう。即ち、官制からは、タタル国を「国家」と認める
ことは可能であろう。

第4節「河西タタル国」説批判

これまで見てきたところから、このタタルの「国家」は、モンゴ
ル高原の地にあった九姓タタルの国であると当然推測できるのであ
るが、この問題について、中国人研究者の多くはタタル国を河西地
方（現中国甘肅省北部）にあったと想定し、これを「河西タタル国」
と呼ぶ⁽¹²⁾。この点について、以下検討したい。

10世紀ごろに河西タタル国が存在していたと主張する研究者が頼っ
ている主な史料に、当時河西地方で活動していたタタル人に関係す
る敦煌文書が挙げられる。これらのタタル人に関係する文書は約20
件あまりある。そのうち、唯一タタル人の住地を明記したのは、張・

榮兩氏によると、その作成年代が10世紀初頭と考えるべきコータン語 P.2741文書である [張・榮1993: 128-129]。当該文書の第118～120行に、内乱の起こった甘州ウイグル王国が沙州帰義軍政権と戦争状態にあった時、タタル人は馬に乗って2、3回甘州と沙州の間に位置する黒山と蓼泉まで行って、肅州と蓼泉間の道路を閉鎖したと述べられている [Bailey 1968: 66]。文書中、タタル人の住地は Buhäthum と記録されているが、バイリーはこれを漢語の「武」と「都」を音写したものと考えて、問題の町を黄河流域に求めている [Bailey 1982: 84, 86; Bailey 1985: 93]。また10世紀のシルクロード貿易商人が残した敦煌出土のソグド語文書を研究したシムズ＝ウィリアムズとハミルトンが、P.28ソグド語文書に記録されたタタルを分析した際、その住地を河西地方北辺の砂漠地域を指すと推定し、P.2741文書の分析と合わせて甘州・肅州間にタタル人が存在していたという見解を示している [Sims-Williams & Hamilton 1990: 45注E9.1]。更にP.2741文書を初めて中国に紹介した黄盛璋は、タタル人は2、3時間馬に乗れば、黒山と蓼泉に着くと解釈した [黄1989: 44]。

これに対し、筆者はP.2741文書に記録されたタタルの住地 Buhäthum を、古トルコ語で Boquγ-qan-baliq と復元し、これを『遼史』に記録された「ト古罕城」、即ち漠北のオルホン河畔にあった東ウイグル可汗国の都だった Ordu-baliq、現在のカラバルガスン遺跡に比定したのである [白2007: 235-238]。P.2741文書についての筆者の考えが正しければ、モンゴル高原中央部の九姓タタルが10世紀初頭に遠く河西地方まで進出していたことになる。

また『宋会要輯稿』・蕃夷4 [中華書局影印版1957: 7714] で至道2年(996)⁽¹³⁾に甘州ウイグルと共に宋に入朝して、タンゲート族の李繼遷を撃つことを申し出たタタルは漠北の九姓タタルを指すという孫修身の考え [孫1994: 47] にも賛成を示した上、筆者は敦煌文書に記録された甘州ウイグルと同盟関係にあったタタルは、いずれもモンゴル高原の九姓タタルであるという見解を改めて示した [白2007: 238-242]。更に10世紀に沙州帰義軍政権と通行関係を有し、一つのまとまった政治集団として取り扱われているタタルが、同様

に九姓タタル国であることに関しては、筆者は別稿を用意している。ここでは史料上に存在しない「河西タタル国」という言い方が、中国国内では通説のように利用されているのは不適切だということを指摘しておきたい。

以上のように、筆者は第3節で紹介した「天王娘子」と「宰相允越」の名義で960年代に宋に朝貢したタタル国を、河西タタル国と見なす見解には賛成しない。

第5節 「九姓タタル国」の外交関係

第3節では官制からは、九姓タタル国は「国家」と認めるべきという見方を示したうえ、第四節では漢籍の塔坦国はモンゴル高原の九姓タタル国を指すということを改めて指摘した。本節では、外交関係から九姓タタル国が「国家」として機能していたことを推察する。

太平興国6年(981)、宋使・王延徳が西ウイグル王国への出使途中に九姓タタルを訪問したことが彼の旅行記『使高昌記』から知られる。この九姓タタルの地は、モンゴル高原のオルホン河流域を中心にしていたことは、前田直典の考察〔前田1948〕以来、鉄案になっている。九姓タタルの部族を歴訪した王延徳は、その旅行記の中で次のように記している。

〔史料D〕『使高昌記』〔長沢1975：588の校訂本によるが、文字異同の明記は省く〕

〔前略〕次歴屋地因族。蓋達于于越王子之子。次至達于于越王子族、此九族韃靼中尤尊者。次歴拽利王子族。有合羅川、唐回鶻公主所居之地、城基尚在〔後略〕。

〔前略〕次には屋地因族（の住地）を過ぎた。（屋地因族）は恐らく達干于越王子の子（の部族）である。次には達干于越王子族（の住地）に至ったが、達干于越王子族は九族韃靼（＝九姓タタル）の中で最も尊い部族である。次には拽利王子族（の住地）を過ぎた。（その地には）合羅川があり、（そこは）唐からウイグルに嫁いだ公主が住んでいたところであり、（公主が住んでいた）

城の土台はまだ残っている〔後略〕。

上掲〔史料D〕中、達干于越王子族は九姓タタル中最も尊いと言われ、九姓タタルの最も有力な部族と見られる。また、屋地因族は恐らく達干于越王子の子の部族と言われ、つまり、九姓タタルの最も有力な酋長が自分の子供を他部の長としているのである。前田はこの記述から、九姓タタルの社会は単なる部族連合の域を脱して、10世紀には原始国家が成立しかけていたと推定しているが、これを論証するまでには至らなかった〔前田1948：257〕。他方、『統資治通鑑長編』巻24・太平興国8年（983）[566]では「九姓（九族）」を伴わないタタル国に関して、次のように述べている。

〔史料E〕

塔坦国遣使唐特墨与高昌国使安骨廬俱入貢。骨廬復道夏州以還。

特墨請道靈州、且言其国王欲觀山川迂直、挾便路入貢。詔許之。

塔坦（タタル）国は使者の唐特墨を派遣して、高昌国の使者安骨廬と共に入貢させた。安骨廬は帰り道は夏州經由で帰った。

唐特墨は靈州を經由する道を請い、且つその国王が地形（の險要）と（道路の）迂直を観察して、近くて便利な道を選んで入貢することを望んでいると言った。詔を下してこれを許可した。

〔史料E〕の国王の名義で宋に朝貢したタタル国に関しては、前田はモンゴル高原の九姓タタルと考えている〔前田1948：254〕。これに対し、陸慶夫・張久和・施安昌三氏〔陸1992：569；張1998：192；施2000：71-74〕はいずれも河西地方にあったと考えて、「河西タタル国」と想定している。果たして、「河西タタル国」説の方が正しいであろうか。

〔史料E〕から、高昌国の使者は夏州經由で帰国したが、タタル国の使者は靈州經由で帰国することを要求したことが知られる。夏州は黄河湾曲部の南にあるオルドス地方の南端に位置する現陝西省靖辺県にあり、一方の靈州は夏州より西で、北流する黄河の西となりにある現寧夏回族自治区の靈武市に当たる。靈州は当時河西回廊を經由するシルクロード幹線道路から中国本土に入るための要衝として機能していた。靈州經由で宋と連絡を取っていたタタル国を

「河西タタル国」とみなす意見が存在する裏には、靈州と河西地方の交通の便が大きく影響していると思われる。しかし、中唐以降、靈州は中国本土と西域を結ぶ交通要地である一方、北側にある西受降城及び賀蘭山を經由してモンゴル高原のウイグル本土に繋がっていたのである〔嚴1985：207, 217-218〕。モンゴル高原のタタル国が、嘗ての東ウイグル可汗国のように、靈州を利用して中原王朝と連絡を取ることは当然ありうる。

『統資治通鑑長編』巻22〔490〕によると、太平興国6年（981）3月に、高昌国（西ウイグル王国）が初めて使者として、都督麦索温を北宋に派遣して朝貢したという。そして、同年5月の条〔492〕では、これの答礼使として、王延徳一行が高昌国に派遣されている。『宋史』巻490・高昌伝〔中華書局標点本：14112〕によると、5月に出発した王延徳一行は翌年（982）4月に高昌国に着き、翌々年（983）の春に帰途につき、雍熙元年（984）4月に都に戻ったという。王延徳のこの旅程を見ると、前掲〔史料E〕の太平興国8年（983）に朝貢した高昌国の使者とタタル国の使者は、王延徳が高昌国に滞在していた期間中に、両国から宋に送り込まれたものと見られる。

他方、『統資治通鑑長編』巻25・雍熙元年4月の条〔579〕において、北宋を代表して出使した王延徳に関して、以下のように記述している。

〔史料F〕

延徳初自夏州歴王^{ママ}庭鎮・黄羊平、所過蕃部、皆以詔書賜其君長襲衣・金帶・繒帛。其君長各遣使謝恩。又明年、延徳与其使凡百余人、復循旧路而還、於是至京師。

（王）延徳はじめは夏州から王（玉）庭鎮・黄羊平を經由したが、通過した蕃部に対し、みな詔をもってその部族長に（宋の）礼服、黄金で飾った帯と絹を賜った。（そこで）それらの部族長はそれぞれ使者を派遣して（宋に）謝恩した。また翌年に、王延徳はそれらの部族の使者、およそ百人余りと共に再びもの道に沿って帰国し、こうして（王延徳は）都に戻ってきた。

〔史料F〕の後半で述べられている「明年」、即ち王延徳が都に戻っ

てきた年は、先に言及したように、雍熙元年、即ち984年なのである。すると、「明年」の直前に、王延徳の訪問を受けた蕃部が宋に謝恩使を送った年は983年だったことは明らかである。つまり、前田が指摘したように、983年に国王の名義で西ウイグル王国と共に宋に朝貢したタタル国は、王延徳が歴訪した九姓タタルと認めるべきである。

一方、南宋・李心伝撰『建炎以来朝野雜記』・「韃靼欽塞・蒙国本末」〔文海出版社1967：1184〕では、タタルの朝貢に関して、次のように伝えている。

〔史料G〕

〔前略〕（達靼）太祖・太宗朝各再入貢、皆取道靈武而來。及繼遷叛命、遂絶不通。因為契丹所服役〔後略〕。

〔前略〕（タタル）は（北宋の）太祖・太宗の治世に、それぞれ二回入貢してきたが、みな靈武を経由して来ていた。（タンゲート族の）（李）繼遷が（宋に）叛くと、遂に（宋との）連絡が途絶えて不通になった。それによって（タタルは）契丹に服属することになったのである〔後略〕。

〔史料G〕に見える朝貢は正に『統資治通鑑長編』巻7・乾徳4年（966）、巻10・開宝2年（969）、巻24・太平興国8年（983）と『宋会要輯稿』・蕃夷4・至道2年（996）の朝貢と一致する。上述したように、太平興国8年に朝貢したのは、漠北の九姓タタル国と考えられることを考慮すると、その他の3回の朝貢もすべて九姓タタル国によるものと認めるべきである。つまり、国王・天王娘子・宰相の名義で宋に朝貢していたタタル国は、李心伝のいうように、いずれも11世紀初頭から徐々に契丹の支配下に組み込まれていくようになった漠北の九姓タタル国と認めるべきなのである⁽¹⁴⁾。

では、九姓タタル国は何故「天王娘子」、「国王」、「宰相」、「天王娘子」の息子の名義で個別に宋に朝貢していたのであろうか。

土肥義和がその作成年代を898～903年と推定する甘州ウイグル王国・唐朝間の朝貢貿易の詳細を記録した敦煌出土S.8444文書が、われわれにヒントを提供してくれる。紙数の関係で細かい紹介は控え

るが、当該文書から甘州ウイグル王国は、可汗、宰相、皇后、公主の名義で唐に入貢し、唐朝からの高額の特産物を入手し、またそれがもたらす商業利益を獲得しようとしていたことが知られる〔土肥1988：401-403, 407-418〕。S.8444文書に鑑みると、九姓タタル国からの異なった名義での宋に対する朝貢は、やはり「国家」の中央政府主導の官営貿易と見なすべきであり、その目的の一つには「国家」運営の財源を確保することが考えられる。九姓タタル国が直接宋と朝貢貿易関係を保っていたからこそ、宋・遼間の戦争が終結して、両国間に「澶淵の盟」が結ばれた翌年、『遼史』巻14・統和23年（1005）6月の記事〔161〕には「甲午、阻卜酋鉄刺里遣使賀与宋和（甲午、阻卜の部族長鉄刺里が使者を派遣して宋と和解したことを祝賀した）」、「己亥、達旦国九部遣使来聘（己亥、タタル国九部が遣使して礼物を献じた）」とあるのである。

以上より、10世紀には九姓タタル国が宋と朝貢貿易関係を結んでいたことは確かである。この新たに見出された事実を当時彼らが契丹とモンゴル高原の覇権を争っていたという通説と合わせて考慮すると、外交関係の面において、九姓タタル国は当時一つの「国家」として機能していたと言えよう。

終　わ　り　に

本稿の考察結果をまとめると、次のようになる。

イエニセイ碑銘のE 59碑銘から、キルギス人から「九姓タタル国」と呼ばれたタタル人集団がいたことが知られる。そして、タムガの様式に基づいた考察から、E 59碑銘の紀年はおおよそ10世紀初頭から10世紀末と考えられる。古トルコ語における部族名称の後ろに継ぐel「国」の意味、また漢籍史料から知られるタタル国の官称号に関する分析から、10世紀から11世紀において、タタルは「国家」とも言える姿を形成していたと見られる。このタタル国は、中国国内で通説になっている「河西タタル国」ではなく、モンゴル高原中央部の九姓タタル国なのである。王とその一族、宰相をかかえるような有力な政治集団を形成していた九姓タタル国は、当時契丹（遼）・

宋・甘州ウイグル・西ウイグル、更にタンゲート（西夏）等の勢力の間に立って、貿易・外交上の役割を果たしていたのである。

以上、モンゴル高原の主役がトルコ系民族からモンゴル系民族に代わる10世紀から11世紀において、最も重要な役割を果たした九姓タタルが当時「国家」とも言える存在であったことを中心に考察を行なった。これによって、匈奴以来、モンゴル高原の遊牧民の歴史が途絶えたように見える問題の時期に、九姓タタル国が当地を支配した国であったことがほぼ明らかとなった。無論、この九姓タタル国については、徴税や軍事制度・裁判制度などから更なる検証が必要である。これらの問題は、今後の課題として残しておきたい。

〔凡例〕 誌名・書名略号は文献目録末尾に掲載している。引用の際には初出年代を表記したが、再録か加筆がある場合、頁数については、再録・加筆の頁数を記す。漢籍の出版情報は初回引用にのみ提示した。

文献目録（和文は五十音順、中文はピンイン順、欧文はアルファベット順）

小野川秀美 1943 「突厥碑文譯註」『滿蒙史論叢』4, pp. 249-425.

片山章雄 1999 「タリヤト碑文」森安孝夫・オチル（編）『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』豊中、中央ユーラシア学研究会、pp. 168-176.

川口久雄 1984 『于闐國和尚阿弥陀經講經文・敦煌資料と日本文学』4』東京、大東文化大学東洋研究所.

白石典之 2001 「9世紀後半から12世紀のモンゴル高原」『東洋学報』82-4, pp. 577-606.

土肥義和 1988 「敦煌発見唐・回鶻間交易関係漢文文書断簡考」『中国古代の法と社会：栗原益男先生古稀記念論集』東京、汲古書院、pp. 399-436.

長沢和俊 1957 「遼の西北路経営について」『史学雑誌』66-8（再録：1979『シルク・ロード史研究』東京、国書刊行会、pp. 305-332）.

—— 1975 「王延徳の『使高昌記』について」『東洋学術研究』14-5（再録：1979『シルク・ロード史研究』東京、国書刊行会、pp. 586-605）.

前田直典 1948 「十世紀時代の九族達靺一蒙古人の蒙古地方の成立一」『東洋学報』32-1（再録：1973『元朝史の研究』東京、東京大学出版会、pp. 233-263）.

- 村上正二 1976 『モンゴル秘史—チンギス・カン物語 3』東京、平凡社。
- 護雅夫 1962 a 「イェニセイ碑文に見える qu (o?) y, öz 両語について」『東洋学報』45-1 (加筆: 1967「イェニセイ碑文に見える qu (o?) y, öz 両語の意義」『古代トルコ民族史研究 1』東京、山川出版社、pp. 515-554)。
- 1962 b 「古代チュルクの社会に関する覚書—「イェニセイ碑文」を中心に」『古代史講座 6』学生社 (加筆: 1967「古代チュルクの社会構造」『古代トルコ民族史研究 1』東京、山川出版社、pp. 94-160)。
- 1986 「イェニセイ銘文に見える “sākiz adaqlıy barım” について」『日本大学人文科学研究所研究紀要』32 (再録: 1992『古代トルコ民族史研究 2』東京、山川出版社、pp. 441-493)。
- 1987 「アルトゥン=キョル第二銘文考釈」、東方学会 (編)『東方学会創立40周年記念東方学論集』(再録: 1992『古代トルコ民族史研究 2』東京、山川出版社、pp. 517-533)。
- 森安孝夫 1989 「トルコ仏教の源流と古トルコ語仏典の出現」『史学雑誌』98-4, pp. 1-35。
- 1991 『ウイグル=マニ教史の研究』京都、朋友書店。
- 森安孝夫・鈴木宏節・齋藤茂雄・田村健・白玉冬 2009 「シネウス碑文訳注」『内陸アジア言語の研究』24、pp. 1-92。
- 白玉冬 2007 「于闐文P.2741文書所見韃靼駐地 Buhäthum 考」『西域文史』2、pp. 231-243。
- 岑仲勉 1937 「李德裕《會昌伐叛集》編證」『国立中山大学研究院文科研究所歴史学部史学専刊』2-1 (再録: 1990『岑仲勉史学論文集』北京、中華書局、pp. 342-461)。
- 1957 「達怛問題」『中山大学学报』3、pp. 114-142。
- 陳得芝 1978 「遼代的西北路招討司」『元史及北方民族史研究集刊』2 (再録: 2005『蒙元史研究叢稿』北京、人民出版社、pp. 25-38)。
- 1986 「十三世紀以前の克烈王国」『元史論叢』3 (再録: 2005『蒙元史研究叢稿』北京、人民出版社、pp. 201-232)。
- 黄盛璋 1989 「敦煌于闐文P.2741, ch.00296, P.2790文書疏証」『西北民族研究』1989-2, pp. 40-71。

- 陸慶夫 1992 「河西達怛考述」『敦煌學輯刊』1992-1・2（再録：1995『敦煌吐魯番文獻研究』蘭州大學敦煌學研究所、pp. 559-574.
- 施安昌 2000 「故宮藏敦煌已巳年樊定延酒破曆初探」『故宮博物院院刊』2000-3, pp. 71-74.
- 孫修身 1994 「試論甘州回鶻和北宋王朝的交通」『敦煌研究』1994-4, pp. 41-54.
- 譚蟬雪 2000 「「君者者狀」辨析—河西達怛國的一份書狀」『1994年敦煌學國際研討會文集—紀念敦煌研究院成立50周年—（宗教文史卷・下）』蘭州、甘肅民族出版社、pp. 100-114.
- 王國維 1928 「韃靼考」『國學論叢』1-3（再録：1959『觀堂集林』卷14、北京、中華書局、pp. 5-27）.
- 嚴耕望 1985 「長安西北通靈州驛道及靈州四達交通線」『中央研究院歷史語言研究所專刊：唐代交通圖考』第1卷、pp. 175-227.
- 亦隣真 1979 「中國北方民族與蒙古族族源」『內蒙古大學學報・哲學社會科學版』1979-1（再録：2001『亦隣真蒙古學文集』呼和浩特、內蒙古人民出版社、pp. 544-582）.
- 余大鈞 1981 「阻卜考」『中國蒙古史學會1981年會論文集』（再録：1983『蒙古史論文選集』1、呼和浩特、蒙古語文歷史學會、pp. 168-219）.
- 張達達・榮新江 1989 「有關西州回鶻的一篇敦煌漢文文獻—S6551講經文的歷史學研究」『北京大學學報・哲學社會科學版』1989-2（再録：1995『西域史地叢稿初編』上海、上海古籍出版社、pp. 217-248）.
- 1993 『于闐史叢考』上海、上海書店出版社.
- 張久和 1998 『原蒙古人的歷史 室韋—達怛研究』北京、高等教育出版社.
- Аманжолов, А. С. 2003 *История и теория древнетюркского письма*, Алматы: Мектеп.
- Bailey, H. W. 1968 *Saka Documents Text Volume, Corpus Inscriptionum Iranicarum*, Part 2, Vol. 5, London.
- 1982 *The Culture of the Sakas in Ancient Iranian Khotan*, New York.
- 1985 *Ttattara, Indo-Scythian Studies being Khotanese Texts*, Vol. 7, London, pp. 92-94.
- Hamilton, J. 1986 *Manuscripts Ouïgours du IX^e-X^e siècle de Touen-Houang*,

Karlgren, B. 1923 *Analytic Dictionary of Chinese and Sino-Japanese*, Paris.
 Kasai, Y. 2008 *Die Uigurischen Buddhistischen Kolophone*, Berliner Turfantexte
 26, Turnhout.
 Klyashtorny, S. G. 1992 Das Reich der Tataren in der Zeit vor Činggis Khan,
Central Asiatic Journal 36, pp. 72-83.
 Кормушин, И. В. 1997 *Тюркские енисейские эпитафии: тексты и исслед-
 ования*, Москва: Наука.
 Кызласов, Л. Р. 1960 Новая датировка памятников енисейской письмен-
 ости, *Советская Археология* 3, pp. 91-120.
 Sims-Williams, N. & Hamilton, J. 1990 *Documents Turco-Sogdiens du IXe-Xe
 Siècle de Touen-Houang*, London.
 Щербак, А. 1961 Новая руническая надпись на камне, УЗ ТННННННН
 9, pp. 238-241.
 Ščerbak, A. 1963 L'inscription Runique d'Oust-Elégueste (Touva), *Ural-Altäische
 Jahrbücher* 35, pp. 145-149.
 Tekin, T. 1968 *A Grammar of Orkhon Turkic*, Indiana University.

『英藏敦煌』=『英藏敦煌文献：漢文仏經以外部份』全15卷、中国社会科学院歷史研究所（ほか）合編、成都、四川人民出版社、1990-1995.

ED = Clauson, G. *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*,
Oxford University, 1972.

謝辞：恩師の森安孝夫・荒川正晴両大阪大学教授より丁寧な指導をいただき、また先輩の田村健氏から貴重なアドバイスをいただき、心より深くお礼を申し上げます。

註

- (1) 「阻卜」とタタルが同定できることに関しては、王1928：6-7；余1981：186-200を見よ。
- (2) 遺跡は現モンゴル国ボルガン県ダシンチレン郡にあるチン＝トルゴイ土城である〔陳1978：32-33；白石2001：592〕。
- (3) 例えば、統和25年（1007）9月、開泰元年（1012）7月～12月、開泰2年（1013）2月と5月、開泰3年（1014）4月、太平6年（1026）3月、咸雍5年（1069）正月に阻卜の反乱が起こっている。詳しくは『遼史』巻14・聖宗紀5、巻15・聖宗紀6、巻17・聖宗紀8、巻22・道宗紀2〔中華書局標点本：163, 168, 172, 176, 199〕を見よ。
- (4) 動詞 al-「取る」〔ED: 124-125〕の連用形 alipan は本来 eldä「国から」の後ろに来るはずであるが、ここでは倒置されているものと見られる。強調のためであろう。
- (5) Ščerbak 1963: 146; Кормушин 1997: 246; 147-148; Klyashtorny 1992: 83.
- (6) E59碑銘のタムガの左上部にある2本の横線は、KTP: 52の筆写では記されていない。しかし、写真では明らかであり、アマンジョロフも明記している。
- (7) 使者が入朝した年代に関しては、編纂史料上混乱が見られる。本稿は岑仲勉1937：449注1、452注1の考察結果に従う。
- (8) クィズラソフ（Л. Р. Кызласов）は、E11碑銘の紀年は10世紀末〔Кызласов 1960: 119〕と考えている。しかし、キルギスの tabγač への朝貢、つまり中国本土への朝貢は10世紀の漢籍史料では一切確認できない。クィズラソフの見解には首肯し難い。
- (9) テキストは Kasai 2008: 196により、訳は Kasai 2008: 197を参照しながら白が作った。
- (10) 例えば、チンギスカンの八代先祖の「蔑年土敦」の名に見える「土敦」は、古トルコ語の官称号 todun で解釈できる〔亦1979：573〕。この todun は、第一突厥可汗国が室韋に派遣したことがある「吐屯」であることが知られている〔『隋書』巻84・室韋伝、中華書局標点本：1882〕。なお、古モンゴル系民族が古トルコ系民族から経済的、文化的影響を受け

ていたことに関しては、亦1979：577；陳1986：203-208を見よ。

- (11) テキストは張・栄1989：218を参照の上、『英藏敦煌』11：107-108；川口1984：2の写真によるものである。（ ）は先行研究による読み替え文字である。
- (12) 陸1992：569；譚2000：103-104；張1998：190-196；施2000：71-74.
- (13) 朝貢年代は『宋会要輯稿』では「至道上年」で、一方の元・馬端臨撰『文献通考』卷348〔浙江古籍出版社：2821〕の甘州ウイグル関係の記事では「至道二年」となっている。『文献通考』では「達怛」・「達鞏」が脱落しているが、その他の内容は『宋会要輯稿』と一致する。年代に関しては、明らかに『文献通考』のほうが正しい。
- (14) タタルが契丹の支配下に組み込まれていくことに関しては、既に長沢・陳の考察〔長沢1957：313-319；陳1978：29〕があり、ここでは繰り返さない。

（中国内蒙古大学蒙古史研究所講師）